

令和 4 年 5 月 28 日現在

機関番号：34305

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13245

研究課題名（和文）「親子をつなぐことば」を育む母語・継承語学習 教科学習支援と二言語創作絵本 -

研究課題名（英文）Mother Tongue and Inherited Language to Nurture Language that Connect Parents and Children: Supporting Academic Learning and Publishing Bilingual Creative Picture Books

研究代表者

滑川 恵理子 (Namekawa, Eriko)

京都女子大学・国際交流センター・助教

研究者番号：70813963

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では母語学習および継承語学習の意義と可能性を探究した。前者について、言語と文化の異なりから子どもの教科学習に貢献することが難しい外国出身の親が、母語を介した教科学習支援に参加した事例を分析し、多様性を考慮した環境づくりの必要性が示唆された。後者について、外国につながる親および家族を主人公とする、母語と日本語の二言語を介した創作絵本を制作し、ウェブサイトで公開した。新聞紙上に記事が掲載されるなど、母語・継承語に対する関心を高めることができた。また、参加者はこれまで知らなかったお互いの横顔を知るなど「日本人＝教える人／外国出身の人＝教えられる人」という関係を再構築する効果が窺えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国につながる子どもを対象とする母語を介した教科学習に関する学術的意義として、先行研究では焦点化されていなかった教材文のテーマについて新たな可能性を見出したこと、先行研究では人的リソースや協働の観点から環境づくりを議論したが、視覚素材や資料という環境づくりの新しい視点をもたらしたことが挙げられる。本研究の母語・継承語活動（母語と日本語の二言語による創作絵本の制作）は、当事者が絵本の主人公となる点が独創的であり注目を集めた。社会的意義として、ウェブサイト開設や新聞記事の掲載により国内外の広範囲に啓発を促すとともに、複数の団体やグループとのコラボ企画を実現し母語・継承語活動の発展に貢献した。

研究成果の概要（英文）：This study explored the significance and potential of mother tongue learning and inherited language learning. Regarding the former, we analyzed a case in which parents from abroad, who had difficulty contributing to their children's academic learning due to language and cultural differences, participated in supporting academic learning through their native language, suggesting the need to create an environment that takes diversity into consideration. For the latter, we created four original bilingual picture books in native language and Japanese, featuring parents and family members from abroad, and published them on our website. After that, articles about them appeared in one newspaper. The program also had the effect of reconstructing the relationship between "Japanese = those who teach and those from other countries = those who are taught".

研究分野：バイリンガル教育 日本語教育 母語・継承語教育

キーワード：外国につながる子ども 外国人の親 母語 継承語 多言語絵本 デジタル絵本 教科学習支援 アイデンティティ・テキスト

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)外国につながる子どもに対する教科学習支援において、子どもの親は言語と文化が異なり、また教育や言語の専門家でもないがゆえに「蚊帳の外」に置かれるという状況がある(=研究課題1:外国出身の親が母語話者支援者として参加する母語学習の意義と可能性の探求)。

(2)外国につながる子どもが母語・継承語(および母語・継承語に伴う文化)に親しむ、あるいはそれを学習する機会は増えているが、一般的な言語や文化を提供するものが多く、親自身の間接が母語・継承語を介して直接子どもに伝わるような取り組みは少ない(=研究課題2:当事者を主役とする継承語学習の意義と可能性の探求)。

2. 研究の目的

(1)研究課題1に関し、外国につながる子どもの教科学習において「蚊帳の外」に置かれがちな外国人の母親が教科学習支援に直接貢献した事例を分析し、その意義と可能性を探求する。具体的には、どのようなテーマにおいて、どのような学習環境があればそれが可能となるのかを明らかにする。

(2)研究課題2に関し、外国につながる親および家族を主人公とする、母語と日本語の二言語を介した創作絵本の印刷版およびデジタル版を作成することによって、社会にどのような影響を与えたか、参加者にどのような気付きや関係性の変化がもたらされたのかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1)外国につながる子どもの教科学習において外国人の母親が実際に教科学習支援に貢献した事例から得られた会話データやワークシート、使用した教材や視覚素材などを分析する。外国出身の親などが教科学習支援に貢献するためには、テーマに即応したどのような環境づくりが必要なのか、どのような視覚素材や資料が有益であるかを分析する。

(2)二言語創作絵本の活動から得られた活動記録やインタビューデータを分析し、社会にどのような影響を与えたのか、参加者がどのような気付きを得たのか、参加者間にどのような関係性の変化がもたらされたのかを明らかにする。

4. 研究成果

(1)研究課題1に関し、2020年8月研究発表を行った。言語と文化が異なる外国出身の親などが教科学習支援に貢献するための環境づくりのあり方を探求した。具体的には外国につながる小学生を対象とする母語による教科学習支援において子どもの母親が母語話者支援者として貢献した事例で、使用した視覚素材や資料などを分析した。分析の結果、視覚素材等が環境づくりとして重要な役割を果たしていることが分かった。さらに視覚教材等は単に言語と文化の異なりを解消するためではなく、参加者が新たな世界を発見し、視野を広げる窓口となっていることが分かった。このことから、環境づくりの上に主体的な学び手として能力を発揮している外国につながる親子の姿=「言語と文化における弱者」のみではない姿が示唆された。

(2)研究課題1に関し、学術論文を投稿し2021年10月に刊行された(引用文献・資料)。外国につながる小学生を対象とする教科学習支援において戦争をテーマとする国語の教科学習支援の事例を分析した。戦争という難解なテーマを前に、母語話者支援者として学習支援に参加した子どもの母親は、母親ならではの喩えや暮らしに根差した解説を子どもに対して行っていた。子どもは母親の話聞くことによって現実感をもって戦争の被害とはどのようなものかを想像できていることが窺えた。母親と子どもの言語的文化的背景に十分配慮した環境づくりをすることによって、戦争といった難しい社会的テーマにおいても外国出身の母親が子どもの教科学習に貢献できることを明らかにした。

(3)研究課題2に関し、外国出身の親の子ども頃のエピソードなどをもとにした二言語創作絵本を4冊(そのうち1冊は3言語版がある)制作した。言語の組み合わせは、日本語×中国語、日本語×スペイン語、日本語×アラビア語である。印刷版とともにデジタル版(二言語音声付動画、youtubeを利用)を制作し、2021年8月新たに開設した専用ウェブサイト(引用文献・資料「たげんごオリジナルえほん」)にて公開を始めた。サイトは月平均で130人ほどの訪問者があり、海外(メキシコ、英国、米国、イタリア等)からのアクセスも見られる。世界中からの名も知らぬ訪問者による閲覧は印刷版のみでは得られない反響である。ウェブ公開の効果は大きく、9月には新聞報道(京都新聞丹波版2022年9月5日)に協力した。

(4)研究課題2に関し、研究会および学会において(国内2回、海外1回、いずれもオンライン開

催)ラウンドテーブル、デモンストレーションを行った。創作絵本活動は具体的で詳細な文化理解の場となったこと、日本人参加者の母語・継承語に対する理解が大きく進んだこと、参加者はこれまで知らなかったお互いの横顔を知るに至ったこと、製作過程にこそ意義があることなどが報告された。これらはこれまでの「日本人＝教える人、助ける側の人 / 外国出身の人＝教えられる人、助けられる側の人」という関係を再構築するものであり、当事者の物語を当事者の言語で作品化することの意義と可能性が示唆された。

(5)研究課題2に関し、ウェブサイト「たげんごオリジナルえほん」における二言語創作絵本の公開以後、国内外の組織・団体やグループとの交流が生まれ、イベント参加の招へいや執筆依頼につながった。2021年10月と12月、NPO等の主催による多言語読み聞かせのイベントに招かれて参加した。さらに執筆依頼を2本承諾した。ドイツ在住の日本語とつながる子どもたちのためのポータルサイト「つなぐ」のリレーエッセイ(2022年7月掲載予定)、MHB(母語・継承語・バイリンガル教育)学会20周年記念誌における寄稿(2023年秋発行予定)である。このように、本研究における当事者を主役とする二言語創作絵本の活動は、母語・継承語学習と関連の研究、多文化理解を推進する市民活動など、この分野に関わる市民活動や教育・研究の進展に寄与することができた。

<引用文献および引用資料>

滑川恵理子、「言語少数派の子どもとどのように戦争を学ぶか 母親と協働で行った母語による国語の学習支援から」、『言語文化と日本語教育』、第56号、2021、1-10
ウェブサイト「たげんごオリジナルえほん」<https://tagengo-original-ehon.com/>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 滑川恵理子	4. 巻 56号
2. 論文標題 言語少数派の子どもとどのように戦争を学ぶかー母親と協働で行った母語による国語の学習支援からー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化と日本語教育	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 滑川恵理子
2. 発表標題 CLD生徒の教科学習理解を促すための様々な素材やツール
3. 学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 滑川恵理子
2. 発表標題 親子による二言語創作絵本の活動 親たちのアイデンティティ・テキスト
3. 学会等名 CAJLE: カナダ日本語教育振興会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 滑川恵理子
2. 発表標題 母親と協働で行なった母語と日本語による教科学習支援
3. 学会等名 BMCN（バイリンガル・マルチリンガル・子どもネット）オンライン国際フォーラム2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 滑川恵理子 児嶋きよみ
2. 発表標題 親子による二言語（お母さんの母語と日本語）絵本作り
3. 学会等名 京都地域日本語教室ネットワーク研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 滑川恵理子 田中ひろこ
2. 発表標題 学習支援教室における絵本作りについて
3. 学会等名 外国につながりをもつ子どもの学習支援教室学習成果・取り組み発表会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 滑川恵理子
2. 発表標題 多言語デジタル教材としての創作絵本 CLD家族のアイデンティティ・テキスト
3. 学会等名 MHB（母語・継承語・バイリンガル教育）学会 研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 滑川恵理子
2. 発表標題 多言語教材としての創作デジタル絵本 外国につながる家族のエピソードをもとに
3. 学会等名 日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

2021年8月ウェブサイト「たげんごオリジナルえほん」を開設し、二言語創作絵本4冊（1つは3言語版がある）を公開した。二言語音声付動画と自由に読み聞かせが楽しめる見開き絵本を公開している。
<https://tagengo-original-ehon.com/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------